

遠隔授業観察システムを活用した大学授業の改善に関する実践的研究

—臨床的な指導力の育成をめざした音楽授業の研究を通して—

長島真人*

音楽授業において教師に求められる究極的な力は、子どもたちの学習状況を的確に把握し、事前に立案された学習指導過程を臨機に再構成しながら、学習指導を最適なものにしていく臨床的な指導力である。このような臨床的な指導力は、どのような努力によって形成されるのだろうか？また、このような臨床的な指導力を育成するために、大学の講義では、どのような工夫が必要とされるのだろうか？本研究は、このような問題を解決するために、学生たち一人ひとりが遠隔授業観察システムを通して筆者自身が実践する音楽授業を観察し、自分自身の課題を明確化することができるような講義を工夫した。その結果、学生たちは、理論と実践が統合された具体的な学習指導事例を精緻に観察し、子どもたちの学習活動の中に見られる変容の状況や、子どもたちの学習に臨機に対応していく指導行為の実際を確認し、臨床的な指導力を育てていくために意識すべき自分自身の課題を明確にすることができた。

〔キーワード：音楽授業、遠隔授業観察、臨床的な指導力、学習指導、教授方略、教授方術〕

はじめに

音楽授業の構想において、教師は、音楽科の目標と指導内容、子どもたちの学習状況をふまえながら音楽の学習の論理に基づいた教材研究を試み、学習指導過程や評価の観点を論理的に検討した後に、立案された学習指導過程を具体的に実現させるために教授方略を検討する。そして、音楽授業の実践において、教師は、学習課題に対する子どもたちの反応を的確にみとり、瞬時に学習指導過程を再構成し、もっとも適切な教授方術を臨機に生み出していく。このような音楽授業の実践は、「待った」が効かない状況の中での的確な判断と行為を呼び起こす教師の臨床的な指導力によって具体化される。

しかしながら、筆者が行ってきた大学の講義では、このような臨床的な指導力を獲得するために留意すべき課題を反省的に吟味させるような内容が十分ではなかった。つまり、これまでの講義では、教材研究と学習指導過程立案、指導方略の工夫に内容が集中し、臨機に展開されていく音楽授業の実践にみられる教授学習過程のダイナミズムを吟味し、音楽授業の展開において求められる教師の臨床的な指導力の発現に着目し、検討することが十分にできていなかった。したがって、学生たちは、音楽授業の構想に関して、その特性と課題を理論的に理解することはできても、これらの理論的な知見が具体化された音楽授業の実践に関して、その特性と課題を具体

的に納得することができていなかった。

そこで、音楽授業における学習指導において教師の臨床的な指導力が具体的に発現される状況を学生たちに例示し、その特性を具体的に理解させ、自分自身の指導力育成の課題を明確化させることを目的とした授業を開発することにした。つまり、音楽授業の理論的な側面を学生たちに紹介してきた筆者自身が音楽授業の構想と実践を行い、遠隔授業観察システムを活用しながら、学生たちに観察、検討させる授業を開発した。本論文は、このような見地に基づきながら、大学における遠隔授業観察システムを活用した授業改善の工夫を明らかにし、その成果と課題を検討していくことを目的とする。

1. 音楽教師に求められる臨床的な指導力について

(1) 音楽授業における教授方略と教授方術

一般に、音楽の授業を実践する場合、教師には二つの技が必要になる。一つは、音楽授業を実践する前に準備される教授方略である。もう一つは、音楽授業の実践の場において発現される教授法術である。¹⁾

教師は、音楽授業を構想するために、子どもたちの学習状況を事前に把握し、子どもたちにとって意味のある学習が呼び起こされるような音楽授業を実現させるために、指導内容と教材を吟味し、学習指導計画や学習指導過程、評価の観点と方法を検討する。そして、子どもた

* 鳴門教育大学芸術系（音楽）教育講座

ちに教材を提示する技を検討する。このように、授業の構想の段階において準備され、整えられる技は、教授方略と呼ばれている。音楽授業の場合、事前に検討される伴奏や範唱、範奏、指揮法、アインザッツ、話術、板書、ワークシート、機器の活用術等が典型的な教授方略になる。これらの技は、子どもたちの学習課題の特性と教材の特性に基づいて、論理的に検討され、工夫される。したがって、教授方略は、ロゴス的な技であるといえる。

一方、教授方術は、音楽授業の実践場面において、子どもたちの学習状況を的確にみとり、望ましい学習が展開されるように導いて行く技である。音楽授業の実践の場では、事前に準備された教授方略がそのまま実行されていくわけではない。音楽授業の実践の場では、事前の予想の範囲を超えた子どもたち一人ひとりの多様な反応に対応しながら、望ましい方向に学習を導いていかなければならない。しかも、授業という「待たがきかない」限られた時空間の中で、教師は瞬時に状況を的確に判断し、臨機に対応していかなければならない。教授方術は、このような臨床的な状況の中で、事前に構想した学習指導過程の内容を置き換え、補足し、あるいは、省略しながら、また、事前に準備した教授方略の組み替えや変更を試みながら、子どもたちの学習状況が最適なものになるように工夫され、発現されていく。したがって、事前に行われた教材の吟味や学習指導過程と教授方略の吟味が十分であればあるほど、的確な教授方術の可能性は高まることになる。それゆえに、教授方術は、ロゴス的な教授方略を教師が自己固有のものとして内面化し、さらに、子どもたちの学習状況に共感し、場にふさわしいものとして発現されるパトス的な技であるといえる。

以上のように、音楽授業では、事前に準備される教授方略と、実践場面で臨機に発現される教授方術という二つの技が必要とされている。教授方術は、教授方略が内面化されたものであり、臨機に変更されたものである。また、この二つの技の間には、「教授方略の検討が十分であればあるほど、教授方術が的確なものとして発現される可能性は高まる」という関係が成立している。しかも、音楽授業の実践場面では、個別的な学習課題をもつ子どもたちの具体的な状況と、このような子どもたちの状況と指導内容の双方を念頭に置いて吟味された教材の具体的な内容をふまえながら吟味された教授方略が組み替えられ、教授方術として発現される。そこで、本研究では、具体的な授業場面において、このような教授方術を発現させる能力を臨床的な指導力と呼び、これを「具体的な子どもたちの学習課題と教材を念頭に置きながら、音楽授業の実践場面で、事前に準備された教授方略を臨機に組み替え、的確な教授方術を発現させる能力」と定義する。そして、このような音楽授業における臨床的な指導力の育成をめざした大学の授業のあり方を検討していきたい。

(2) 音楽授業における臨床的な指導力の諸相

音楽授業における臨床的な指導力は、音楽授業の構想の段階で駆使された論理的な思考と、音楽授業の実践経験に基づいて、子どもたちの学習の状況を直感的に把握し、的確な判断によって学習指導を展開していく一連の能力である。つまり、論理的思考を背景にふまえながら、直感と経験と類推によって演じられる指導力である。²⁾したがって、このような音楽授業において必要とされる臨床的な指導力は、音楽授業の構想と実践に関わる種々の能力と経験が総合化されたものである。それゆえに、音楽授業における臨床的な指導力を学生たちが育てていくためには、以下のような理論的な知見と経験を獲得する場を提供することが必要になる。

1) 音楽活動の経験と音楽に関わる学術的な理論の双方から、音楽の特性を理解し、教材となる音楽の教育的価値内容を正しく把握することができる。

学生たちが子どもたちの学びの対象となる音楽の特性を正しく認識していることは、音楽授業における臨床的な指導力を育成していく上で、何よりも基礎的な条件となる。特に、音楽のシンボルとしての特性を哲学的に理解し、音楽理論を駆使して教材となる楽曲を分析し、その特性を解釈することは、教材研究において不可欠の条件となる。³⁾音楽には、形式的な特徴と内容的な特質がある。音楽の形式的な特徴は、楽音によって形作られた構造である。音楽の内容的な特質は、音楽の形式的な特徴によって象徴されている人間感情の様態である。したがって、このような音楽の形式的な特徴と内容的な特性を把握するために必要な情報を、学生たちが獲得できるように、大学の講義は配慮しなければならない。また、多様な音楽の経験ができる場を保障しなければならない。

2) 子どもたちとの交流経験と、音楽の学習理論に基づいて、子どもたちの学習状況を詳細に把握することができる。

子どもたちの学習状況を的確に把握するためには、交流活動のような体験を重ねると同時に、音楽の学習理論に関する知見を明確に理解し、特定の教材を扱った授業場面において子どもたちの内面で生じている学習の展開を観察することができるようになることが必要になる。音楽の形式的な特徴に関わる学習は、音楽のゲシュタルト知覚の論理によって明らかにされる。⁴⁾音楽の内容的な特質に関わる学習は、共通感覚の論理によって明らかにされる。⁵⁾また、音楽の形式的な特徴から音楽の内容的な特質を想像し、子どもたち一人ひとりが固有の音楽の意味を心の中に描く行為は、シンボリック相互作用論によって明らかにされる。⁶⁾音楽の意味は、子どもたちが教

師や他の子どもたちと相互に関わり、音楽を分かち合うことによって生成される。つまり、子どもたちは、音楽の形式的な特徴と内容的な特質に着目すると同時に、共に音楽を探究しようとしている教師や他の子どもたちの表現行為に着目し、内面に存在する「もう一人の自分」、すなわち、自己と対話し、音楽それ自体や他者の音楽表現行為を解釈し、自己固有の音楽の意味を心の中に生成させ、この音楽の意味に基づいて自分自身の表現行為を決定する。要するに、子どもたちは、音楽の形式的な特徴と内容的な特性、他者の表現行為、自己という四つの方向に注意を傾けながら、音楽の学習を展開していく。このような一連の音楽の学習理論を理解することによって、子どもたちの音楽の学習状況を的確に把握され、教材の意味づけや学習指導の目標が明確化されることになる。また、このような音楽の学習理論は、音楽授業の実践経験に基づいて、学生たち一人ひとりの内面に具体的なイメージとして定着し、子どもたちの学習状況を観察するときに応用される。

3) 音楽科のカリキュラムによって明らかにされた指導内容と子どもたちの学習状況の実態から、教材を解釈、あるいは、開発し、適切に意味づけ、音楽の学習指導過程を構想することができる。

音楽科のカリキュラムは、教育行政によって定められた学習指導要領や、特定の研究者によって開発された具体的なカリキュラム案、さらに、教科書に準拠して提案されたカリキュラム案等が参考資料として、また、一つの基準として提供されるが、これらの情報を特定の地域社会の学校に集う子どもたちの学習状況に基づいて再編し、子どもたちにとって最も適正なカリキュラムを指定するのは教師の責務である。また、教師は、この再編を試みたカリキュラムと子どもたちの学習状況に基づいて、教材となる楽曲を吟味し、意味づけ、学習理論に基づいて学習指導過程を構想することになる。特にここでは、音楽のゲシュタルト像が分節化され、音楽のイメージが洗練されていくように、注意を促す情報を系列化させる必要がある。臨床的な指導力を育成していくためには、このような授業構想の手順が確実に理解されていなければならない。

4) 教育実習等を通して、音楽の学習指導を体験し、自分の授業を反省的に振り返ることができる。

音楽授業における臨床的な指導力を育成していくためには、音楽授業の実践を自ら体験し、反省的な考察を通して、その体験を自己の経験として内面化していなければならない。先に述べたように、音楽授業の実践の場において臨機に発現される教授方術は、直感と経験と類推によって形成される。特に、音楽授業の実践経験は、展

開されている子どもたちの学習状況を的確に把握し、この後に続く望ましい学習の展開を類推するための原動力となっている。この実践経験の蓄積によって、他者の音楽授業の実践を的確に観察し、批判することが可能になるのである。

5) 他者によって立案された音楽授業の学習指導案から、授業者の子ども観や教材観、学習指導観を的確に読み取ることができる。

他者が立案した音楽科の学習指導案に記述されている子ども観や教材観、指導観を的確に読み取るためには、子どもたちの音楽の学習の特性と教材となる楽曲の特性を論理的に把握すると同時に、学習指導案に記述されている子どもたちの学習状況や指導者が意図している学習指導過程を具体的にイメージとして想像する力が必要とされる。このようなイメージは、自らの音楽授業の実践経験に基づいて想像される。したがって、自らの音楽授業の実践に関する反省的な考察が緻密に行われれば行われるほど、学習指導案の読み込みは深められることになる。そして、この学習指導案の読み込みが緻密に行われれば行われるほど、授業批判は豊かになり、生産的なものになっていく。

6) 他者によって実践されている音楽授業から、子どもたちの学習の展開と、これに対応して発現される教授方術の実際を確認し、授業の成果と課題を的確に指摘することができる。

他者によって実践されている音楽授業から、子どもたちの学習の展開の実相と教授方術が発現される状況を確認するためには、先に述べたように、指導者によって記述された学習指導案の内容を事前に理解していなければならない。そして、観察者である学生たち自身が、指導者の意に沿って授業の流れを観察し、臨機に発現された教授方術の妥当性を的確に指摘し、その成果と課題を明らかにする分析力と判断力が必要になる。

7) 他者が実践した授業を批判的にとらえ、自分自身の臨床的な指導力の実態を反省的に考察し、留意すべき課題を明確にすることができる。

他者が実践した音楽授業の成果と課題を明らかにすることによって、観察者は、最終的に自分自身の臨床的な指導力の状況をとらえ直し、よりよいものに育成していくために、さらに検討していくべき課題を明確に意識していく必要がある。このような課題意識をふまえながら音楽授業の実践経験を重ね、反省的に考察することによって、臨床的な指導力は洗練されていくことになる。

以上のように、音楽授業における臨床的な指導力を育成していくためには、音楽の理論に関する知見と音楽の

経験、音楽の学習理論に関する知見と子どもたちとの交流経験、教材解釈力、教材開発力、授業構想力、音楽授業の実践経験、他者の音楽授業の構想を理論と経験の双方に基づいて解釈する力、子どもたちの学習の展開と教授術の発現を確認する授業観察力、授業観察に基づいた授業批判力等の諸能力と諸経験を蓄積していくことが必要とされている。したがって、大学の授業において、音楽授業における臨床的な指導力の育成を本格的に開始する時期は、教育実習による実践経験を終えた学部生や大学院生の時期であるように思われる。そこで、次に、教育実習を終えた学部3年生を対象とする大学の授業において試みた授業実践の経緯を紹介する。

2. 遠隔授業観察システムを活用した大学授業の構想

(1) 学部3年生の状況

音楽授業における臨床的な指導力は、音楽と音楽授業に関する理論的な知見と具体的な経験に基づいて育成される。したがって、秋に教育実習を終えた学部3年生の講義から、この能力の育成をめざした講義内容を工夫することが適切であると考えた。附属学校で音楽授業の実習を体験する前に、学生たちは、音楽の基礎理論や音楽科教育の本質に関わる基本的な概念を理解し、教科として音楽を教えることの意味を論理的には理解していた。また、音楽それ自体を専門的に探究する授業にも参加し、音楽の演奏と聴取の能力も育成してきた。しかしながら、このような状況の中で音楽授業の実習を体験した学部3年生の学生たちは、大学の講義で学ぶ音楽や音楽科教育の理論的な知見が音楽授業の実際場面において具体化される状況をイメージすることが困難な状況にあった。つまり、大学において理論的な検討を試みたロゴスのな力と、附属学校における実習授業の実践経験によって獲得したパトスのな力を統一させる道筋を見いだすことが十分にはできていなかった。要するに、学生たちには、音楽授業の展開に関する理論的考察と実践経験を結びつけるイメージが形成されていなかった。⁷⁾そこで、音楽科教育の諸問題を理論的に検討することを目的とした大学の講義を担当している筆者自身が、附属学校で音楽授業を実践し、音楽授業の理論的な側面と音楽授業の実践的な側面を可能な限り接近させた事例研究の場を提供し、彼らの問題状況の解決に接近する授業を構想した。

(2) 遠隔授業観察システムの活用

他大学と同様に、本学の附属学校は大学キャンパスから離れた位置にあり、大学の授業の中で授業観察の場を設定することは、困難な状況にある。そこで、音楽授業の事例研究を紹介する今回の実践は、遠隔授業観察システムを活用して試みることになった。具体的には、筆者

が担当する学部3年生の授業（「専修実地教育」）と同じ時間帯に附属小学校の5年生の音楽授業を組み込み、遠隔授業観察システムの支援によって、学生たちは大学キャンパスの講義室から、筆者が附属小学校で実践する音楽授業を観察し、授業後は、双方向に通信できるモードに切り替えて、授業の実践直後の筆者と授業内容について討議する、という形態で授業を展開した。

(3) 事例研究で扱った歌唱教材「冬げしき」の検討

今回の事例研究は、5年生の子どもたちを対象とし、歌唱共通教材「冬げしき」を扱うことが附属小学校側からの要請で決定されていた。「冬げしき」は、文部省唱歌として大正時代の初期から親しまれ、歌い継がれてきた唱歌ではあるが、一般に、学校現場では、授業の構想と実践が非常に難解な教材として受けとめられている。

第一の難点は、この楽曲が文語文の歌詞になっていることである。文語文であることから、この楽曲を子どもたちの実生活から乖離した馴染みのない歌としてとらえ、指導に困惑している教師が多いようである。第二の難点は、この楽曲が賛美歌風の非常に簡素なスタイルで作曲されていて、変化に乏しく感じられ、テンポも遅いので、子どもたちが日常生活で馴染んでいる音楽とは乖離しているようにとらえ、指導に苦慮している教師もいるようである。

「冬げしき」に対するこのような見解は、音楽の授業を実際に担当している小学校の教師の中にみられるが、一方、学校音楽教育には関わらない大多数の日本人は、この唱歌を世代を超えて分かち合い、歌い継ぐべき国民的な愛唱歌として、とらえているようである。⁸⁾

このように、「冬げしき」に関する見解は、学校の内と外とでは異なっているようである。筆者は、「冬げしき」が学校教育現場で難解な教材としてとらえられがちになる根本的な理由は、この楽曲の持つ特性を今日の小学校5年生の子どもたちの音楽の学習のために意味づける教材解釈の作業が曖昧なために、学習指導の構想が困難になっていることが原因であると考えている。そこで、次に、「冬げしき」の教材解釈を試みたい。

「冬げしき」は、大正2年に出版された「尋常小学唱歌(五)」に掲載され、長く親しまれてきた唱歌である。文部省唱歌として紹介され、現在においても作曲家と作詞家に関しては、不詳のままである。したがって、楽曲の成立に関する情報は何も残されていない。歌われる歌詞は、次のようになっている。⁹⁾

- 一 さ霧消ゆる湊江の
船に白し、朝の霜。
ただ水鳥の声はして
いまだ覚めず、岸の家。

二 鳥啼きて木に高く、
人は畑に麦を踏む。
げに小春日ののどけしや。
返り咲きの花も見ゆ。

三 嵐吹きて雲は落ち、
時雨降りて日は暮れぬ。
若し燈火の漏れ来ずば、
それと分かじ、野辺の里。

ここに示すように、歌詞は文語体で書かれている。したがって、小学校5年生の子どもたちにとっては、難解な歌詞といえる。歌詞の内容は、当時の日本の冬の季節にはよくみられた田舎の風景が朝、昼、夕という三つの時間に分けて描かれている。一番は、冬の夜明け前の船が係留されている入り江で啼きはじめた水鳥たちの様子が描かれている。静かな冬の夜明けの美しい情景である。当時は、農村地帯では田畑に行くために水路を利用していたことが多かったと思われるので、このような湊江は海岸地区だけでなく、いたるところで見られたものと考えられる。二番は、小春日の太陽のうららかな日差しの下に広がる畑の風景が描かれている。人は、当時の冬の風物詩であった麦踏みを行い、鳥が木の上で啼き、春と間違っ咲いてしまった花もみられると歌っている。静かな日中の冬の情景である。今日では、麦踏みは機械によって行われているので、子どもたちが情景を想像するためには、情報を提供する必要がある。三番は、冬の嵐が吹き、時雨が降って日が暮れ、暗くなってきた冬の田舎の情景である。暗くなった闇の中に、人々が生活している燈火が点在している。かまどや囲炉裏の火、ランプ、ろうそく、電灯等の光が見え、それによって、人々が暮らしている民家があることがわかると歌っている。静かな冬の夕暮れの情景である。子どもたちに、燈火という言葉からくる情景を味わわせるためには、情報を提供する必要がある。

「冬げしき」の音楽は、三拍子で作曲された賛美歌風の簡素な旋律の動きが印象的である。リズムの形態は、6年生の歌唱共通教材である「ふるさと」と類似している。調性はへ長調で、最低音が一点八音、最高音は二点二音になり、子どもたちが容易に歌うことができる音域で作曲されている。このことも、「ふるさと」と共通している。

「冬げしき」の冒頭は、マスカーニのオペラ「カバレリア・ルスティカーナ」の「間奏曲」と極めて類似している。しかし、マスカーニの場合は、その後、借用和音を多用して激しい情念を描写しているのに対して、「冬げしき」は、へ長調の固有の和音だけを用い、落ち着いた、静かな感情を描写している。フレーズの後半は、全て同じリズムになり、ディクレシェンドによって音楽のエネ

ルギーが静かに納められるようになっている。

旋律の動きの中で注目すべき非和声音は、「あさのしも」と「きしのいえ」の部分にみられる倚音（いおん）の効果である。これらは、へ長調のⅡの和音（トー変ロー二）の上で鳴り響かせる非和声音で、強拍部の位置にあり、また、前後の比べると長い音になっているので、アクセントが要求される音になっている。

各フレーズの拍節の構造を検討すると、旋律は、第1フレーズでは「さぎりきゆる」の「き」のシラブル、第2フレーズでは「あさのしも」の「あ」のシラブル、第3フレーズでは「ただ」の「た」と「こえはして」の「こ」のシラブルがそれぞれアクセントピークになる。第4フレーズは、和声と旋律の観点から吟味すると「きしのいえ」の「き」のシラブルがアクセントピークになるが、この4小節のフレーズを静かに納めることを意識すると、「いまださめず」の「い」、または、「さ」のフレーズをアクセントピークにすることも考えられる。ここは、一つの解釈に限定されないようである。子どもたちに紹介する範唱CDでは「さ」のシラブルにアクセントピークが置かれ、「ふるさと」の最後のフレーズである「わすれがたき」の「が」のシラブルにアクセントピークを置く場合と同じ方法がとられている。そこで、今回は、この方法で旋律を解釈することにした。「きしのいえ」の「き」のシラブルは倚音であるから、アクセントを置くことになる。しかし、ここは最後のフレーズであり、楽曲全体を静かに納める部分であるから、「あさのしも」の「あ」ほど強いアクセントは置かれず、やや控えめなアクセントを作ることになる。

以上のように、「冬げしき」は、歌詞の内容と音楽の形式的な特徴から、冬の静かな情景と落ち着いた静寂な気分を象徴している音楽であることが確認される。

(4) 5年生の子どもたちの音楽の学習と生活の状況

5年生の音楽授業を構想するために、音楽の学習に対する子どもたちの興味や関心と、冬の音楽に関する学習経験を事前に調査した。また、事前に子どもたちの音楽の授業を参観した。事前の調査では、まず最初に、子どもたちが音楽の授業で好んで参加している活動を尋ねた。遠隔授業観察システムで学生たちが参観した附属小学校の5年生2組の38名の子どもたちの回答の結果は、以下のようになった。

1. 音楽の授業では、どんな活動が好きですか？

質 問 項 目	○	×
みんなでいっしょに歌う。	32	6
一人で歌う。	5	33
みんなでいっしょに楽器を演奏する。	5	33
一人で楽器を演奏する。	10	28

みんなでいっしょに楽器や音の出るものを使って音楽を作る。	19	19
一人で楽器や音の出るものを使って音楽を作る。	8	30
いろいろな音楽を聴く。	37	1
音楽に関係のあるビデオをみる。	22	16
楽譜を書きながら、音楽を作曲する。	10	28

この結果が示すように、子どもたちは、音楽の学習において最も基本となる鑑賞活動に強い関心を持ち、次に、鑑賞活動と同様に緻密な音楽作品と出会うことが可能な歌唱活動に関心を示している。特に、個別的な歌唱活動ではなく、集団の中で分かち合いを通して探究していく歌唱活動に関心を示している傾向が強く確認された。また、音楽を作る活動に関して、比較的多くの子どもたちが関心を示していることから、創造的な音楽活動に取り組むことに関心を持っていることが確認された。したがって、これらの項目の調査から、他者との関わりを意識しながら、音楽を探究し、自分なりに歌唱表現を創造的に工夫することができるような学習場面を構想する可能性と必要性が確認された。

次に、子どもたちが知っている「楽しい冬の歌」と「静かな冬の歌」を尋ねたが、多くの子どもたちがクリスマスの歌の中から楽しい曲想の歌と静かな曲想の歌を報告していた。その他には、正月の歌や冬の唱歌、童謡などが指摘されていた。このことから、子どもたちがすでに冬の情景や雰囲気や「楽しい」と「静か」という主観的な気分の世界として区分し、それぞれの特性を自分なりに想像することができることを確認することができた。したがって、「冬げしき」のように子どもたちにとっては非日常的な冬の世界を象徴している音楽を探究し、イメージを広げ、深めていく可能性が準備されていることを確認することができた。

また、事前の授業観察では、子どもたちが積極的に歌唱表現に取り組もうとする姿を確認することができたが、音楽を分かち合いながら歌声を一つにしていく手がかりや、旋律の特徴を探究し、そのよさを味わいながら自分なりに歌唱表現を工夫していく手がかりが十分に把握できていないように思われた。したがって、「冬げしき」の学習では、このような点に留意しながら教材を意味づけていくことにした。

さらに、附属小学校の第3学期の学校生活を過ごしている5年生の生活状況の特性に関して、音楽担当の教員にインタビューした。このインタビューから、第3学期の5年生は、最高学年への進級が間近に迫り、学校行事として6年生の卒業を祝う全学的な行事では、初めてリーダーシップを発揮する必要に迫られ、自分自身を見つめ直し、落ち着きと責任感を少しずつ意識し始める時期に入ってきているという情報を得た。したがって、5年

生の子どもたちが「冬げしき」の学習を通して、楽曲の中にみられる「落ち着いた静寂な気持ち」と出会い、自分自身の中に潜在していた「落ち着いた静寂な気持ち」を確かめ、第3学期の生活を丁寧に見つめ直すことができるように教材を意味づけていくことにした。

(5) 学習指導案の作成

歌唱教材「冬げしき」の中に見られる音楽的な特性の吟味と子どもたちの音楽の学習と生活の状況をふまえながら、単元の主題と単元目標は、次のように設定した。

単元：「日本語の美しい響きを生かしながら静かな冬の情景を歌おう」

単元目標

1. 日本語の美しさと日本的な風情を想像させる唱歌のよさを知り、歌い継いでいこうとする気持ちを育むことができる。
2. 静かな冬の風情を象徴している曲想を味わいながら、歌唱表現を工夫することができる。（「冬げしき」の中にみられる落ち着いた静寂な気分を味わい、最終学年を間近に迎えようとしている3学期の生活を丁寧に見直すことができる。）
3. 賛美歌風の簡素な旋律の動きの中にみられる拍節の構造（音楽のエネルギーの動態）を生かしながら、歌唱表現を工夫することができる。

授業時間は、3学期全体の授業計画との関係から2時間で完結させることになり、斉唱だけで学習を終えることにした。そこで、2時間の指導計画は、以下のように設定した。

指導計画

- 第一時 ・ 文語体の日本語の響きに馴染み、旋律の動きに注意しながら歌詞唱することができる。
・ 楽曲が描いている冬の情景を想像しながら歌唱表現を工夫することができる。
- 第二時 ・ 楽曲の中にみられるふしのまとまりと音楽の盛り上がりを生かしながら、歌詞唱することができる。
・ 楽曲の中にみられる歌の気持ち（落ち着いた静寂な気持ち）を想像しながら、歌唱表現を工夫することができる。

このように、文語体の日本語の響きと旋律の動き、そして、楽曲の中に見られる「落ち着いた静寂な気持ち」を探究することに重点をおいた学習指導過程を立案することにした。そこで、ここまでの検討から、子ども観と教材観、指導観を以下のようにまとめた。

指導にあたって

第3学期を迎えた5年生の子どもたちは、6年生を送る会を準備し、学校内で本格的にリーダーシップを発揮することになり、最高学年になっていく心の準備が芽生え

始めている。したがって、まもなく訪れる最上級生としての生活を見据え、日々の生活を見つめ直す時期に入ってきていると思われる。

こんな生活を送り始めている5年生の子どもたちにとって、落ち着いた静寂な冬の風情を象徴している歌唱共通教材「冬げしき」は、自分たちの生活をより豊かなものにとらえ直していく上できわめて有効な教材であるように思われる。この楽曲は、文語体で書かれた難解な歌詞であるにもかかわらず、簡素な和声と旋律の動きによって文語体の日本語の美しい響きが生かされ、子どもたちが音楽の気持ちを深く味わい、そのよさを知り、自分なりに望ましい歌唱表現を工夫していくことが可能な教材である。また、この楽曲は、作詞家、作曲家不詳の楽曲であるにもかかわらず、日本人の愛唱歌として長く歌い継がれ、今日では、歌詞が英訳され、海外にも紹介されている楽曲である。

具体的な指導にあたっては、旋律の中にみられる文語体の日本語の美しい響きと、非和声音や最高音、旋律音形、リズムパターン、和声の動きによって特徴づ

けられている旋律の動きに注意を促し、子どもたちがこの楽曲の旋律の動きの中にみられる拍節の構造を把握し、楽曲が象徴している「落ち着いた静寂な気持ち」を音楽から想像し、音楽の気持ちにふさわしい歌唱表現を工夫することができるように留意していきたい。そして、この楽曲との出会いを通して、自分の中に潜在していた「落ち着いた静寂な気持ち」を確かめ、5年生第3学期の生活を丁寧に見つめ直すことができるように促していきたい。

以上のように、歌唱教材「冬げしき」の吟味は、楽曲の中に見られる形式的な特徴と内容的な特性、そして、子どもたちの音楽の学習と生活の状況をふまえながら、2時間の授業時間の中で学習可能な内容を特定した。そして、ここまで検討してきた内容を、学部3年生の学生たちに講義で紹介し、楽曲の分析から学習指導過程の立案に至る手順を検討した。その結果、この2時間の学習指導過程は、以下ようになった。

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点
導 入	1. 指導者と対面する	1. 文語体の日本語の美しい響きが生かされた日本の歌を学習することが課題であることを伝える。 ・音楽の授業の雰囲気高める。	・学習への構えが成立しているか。
展開(1)	2. 「冬げしき」の旋律の動きを聴唱法によって把握する。 ・範唱用CDで「冬げしき」を鑑賞し、楽曲全体の雰囲気を味わう。 ・範唱用CDに合わせて歌う。 ・範唱を模倣しながら歌う。 ・ピアノ伴奏をよりどころとしながら歌う。 ・もう一度、範唱用CDを聴き、拍の流れに注意しながら旋律の動きを確認する。	2. 楽曲全体の雰囲気を感じ取らせる。 ・範唱用CDとピアノ伴奏から楽曲全体の雰囲気を把握させる。 ・三拍子の拍の流れの流れて歌えるようにピアノ伴奏で注意を促す。特に、呼吸のタイミングに注意を促し、一緒にそろえて歌い始めることができるように工夫させる。	・自分なりに楽曲全体の雰囲気を特徴づけることができたか。 ・三拍子の拍の流れの流れて歌えるようにピアノ伴奏で注意を促す。特に、呼吸のタイミングに注意を促し、一緒にそろえて歌い始めることができるように工夫させる。
展開(2)	3. 歌詞の意味と文語体の日本語の美しい響きに注意しながら、歌唱表現を工夫する。 ・文語体の日本語の響きを確かめる。 ・歌詞の意味を確かめる。 ・文語体の日本語の美しい響きが生かされた歌唱表現を工夫する。	3. 文語体の日本語の美しい響きを味わわせながら、歌唱表現として生かせるように工夫させる。 ・指導者の朗読を模倣しながら歌詞と一緒に朗読し、歌詞の中にみられる言葉のリズムを確認させる。 ・冬の朝、昼、夕の情景が描かれていることを確認する。 ・言葉の響きが歌唱表現として明確に生かされるように、発声に注意を促す。特に、母音の発声に注意を促す。 ・文語体の日本語の美しい響きが生かされた歌唱表現を味わわせる。	・歌詞の意味から描かれている情景を確認することができたか。 ・旋律の中に生かされている文語体の日本語の美しい響きに注意を向け、情景を音楽から想像しながら歌唱表現を工夫することができたか。
まとめ	4. 本時のまとめとして、ピアノ伴奏に合わせて、3番まで通して歌う。 ・本時に注意したことを思い出ししながら歌う。 ・ワークシートで本時で学んだことを確認する。	4. 本時の学習で自分なりにとらえることができた歌の気持ちを生かしながら歌えるように促す。 ・本時の成果を振り返り、次時の学習課題を伝える。	・歌詞の内容と文語体の日本語の美しい響きをよりどころとしながら、楽曲全体の曲想を味わい、歌唱表現を工夫することができたか。

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点
導 入	1. 既習曲を歌う。 ・本時の課題を確認する。	1. 音楽の授業の雰囲気をも高める。 ・文語体の日本語の美しい響きを生かすと同時に、ふしのまとまりに注意しながら、より豊かな歌唱表現を工夫することを伝える。	・学習への構えが成立しているか？
展開(1)	2. 歌詞の意味と文語体の日本語の美しい響きを確認しながら、歌唱表現を工夫する。 ・範唱用 CD を聴き、楽曲全体の雰囲気を出し出す。 ・範唱用 CD やピアノ伴奏に合わせて歌う。 ・文語体の日本語の響きを出し出す。 ・歌詞の意味を出し出す。 ・範唱用 CD を聴き、文語体の日本語の美しい響きと歌の気持ちを確認する。 ・文語体の日本語の美しい響きが生かされた歌唱表現を工夫する。	2. 文語体の日本語の美しい響きを出し出ししながら、その効果が歌唱表現として生かせるように工夫させる。 ・冬の情景が描かれた歌であったことを思い出させる。 ・三拍子の拍の流れにのりながら歌えるように注意を促す。 ・指導者の朗読を模倣しながら歌詞と一緒に朗読し、歌詞の中にもみられる言葉のリズムを確認させる。 ・冬の朝、昼、夕の情景が描かれていることを確認する。 ・文語体の日本語の美しい響きが生かされた歌のよさを思い出させる。 ・言葉の響きが歌唱表現として明確に生かされるように、発声に注意を促す。特に、母音の発声に注意を促す。	・歌詞の意味を確認し、描かれている情景を出し出すことができたか。 ・旋律の中に生かされている文語体の日本語の美しい響きに注意を向け、情景を音楽から想像しながら歌唱表現を工夫することができたか。
展開(2)	3. 歌詞の意味とふしのまとまりに注意しながら、楽曲全体の曲想をとらえ直し、より豊かな歌唱表現を工夫する。 ・旋律の中にみられるエネルギーの推移に注意しながら範唱用 CD やピアノ伴奏を聴き、より豊かな旋律表現を工夫する。 ・歌詞の内容をよりどころとしながら、落ち着いた静寂な冬の世界を音楽から想像し、歌唱表現に行かせるように工夫する。	3. 歌詞の内容をより詳細に確認させると同時に、非和声音や最高音、旋律音形、リズムパターン、和声の動きによって特徴づけられている旋律の動きに注意を促し、文語体の日本語の美しい響きが生かされた歌唱表現を工夫させる。 ・和声の動きと旋律の動き、文語体の日本語の響きに注意を促し、旋律の動きの中にみられる緊張、アクセントピーク、弛緩の様態を味わい、歌唱表現に生かすことができるように工夫させる。 ・「みなとえ」と「麦をふむ」「ともしび」という歌詞に着目し、かつての日本のいたるところでみられた冬の自然と人々の暮らしの様子を音楽から想像させる。 ・楽曲が描いている情景や心情を音楽から想像し、ふしのまとまりを生かしながら歌唱表現ができるように工夫させる。	・楽曲の中にみられる文語体の日本語の美しい響きと旋律の動きの中にみられる緊張、アクセントピーク、弛緩の様態を生かしながら、歌唱表現を工夫しているか。 ・楽曲の中にみられる落ち着いた静寂な気持ちを味わいながら、歌唱表現を工夫しているか。
まとめ	4. 本時のまとめとして、最初から通して歌う。 ・学習を振り返り、ワークシートにまとめる。	4. 本時の学習で自分なりにとらえ直すことができた曲想を生かしながら歌唱表現することができるように注意を促す。	・文部省唱歌として歌い継がれてきた「冬げしき」のよさを自分なりに知ることができたか。

3. 授業の実践と結果からの考察

(1) 実践の経緯

附属小学校での実践は、5年生3学級に2時間ずつ授業を行い、大学の学部3年生の授業との時間調整が可能であった一学級（5年2組）の授業を大学の実地教育の授業と重複させ、遠隔授業観察システムを活用した授業観察を実施した。一週間前の講義で、先に述べた教材研究と学習指導の構想に関して、学生たちと一緒に検討を行い、授業の目的と内容、方法の確認を行った。授業観察の時間帯は、大学の第4時限（14時40分から16時10分）の授業の中で、附属小学校の第6時限（14時55分から15時40分）の授業を行った。したがって、最初の15分間に大学側とシステムを立ち上げる確認作業を行い、学生たちが大学キャンパスの講義室に集まっていることを附属小学校側から確認した。その後、45分間、筆者は附属小学校側で授業を行い、学生たちはスクリーンを通して授業を観察した。カメラの方向は、事前に打ち合わせ、基本的に子どもたちの学習活動を映し出し、筆者が板書しながら、子どもたちに旋律表現のあり方を工夫させる場面だけは、ホワイトボードを映し出すようにした。附属小学校での授業が終了し、子どもたちが教室を退出した後で、30分間、双方向に通信できるモードに変換し、学生たちと一緒に授業を振り返った。学生たち一人ひとり、授業の観察を通して、気づいたことや、考えたこと、疑問に思ったことなどを簡潔に報告し、授業を終えた直後の筆者が、学生たち一人ひとりに対して、コメントや指導を入れた。一週間後の講義で、再度、この授業の実践過程を見直し、今回の授業観察によって得ることができた内容を確認しあつた。

(2) 附属小学校での実践の成果

附属小学校では、音楽担当の三人の教諭の他に、学級の担任教諭や研究部の教諭が授業を観察した。一般に難解な教材としてとらえられている「冬げしき」を扱った授業実践の事例は、今後の授業研究の参考になったようであった。特に、旋律の表現のあり方を子どもたち自身が工夫しながら、歌唱表現を洗練させていく学習指導過程は、参考になったようであった。

附属小学校の5年生の子どもたちは、文語体の日本語の美しい響きが生かされた「冬げしき」の音楽のよさを深く味わいながら、歌唱表現を工夫することができたようであった。このことは、ワークシートの記述内容や、旋律の中にみられる拍節の構造を確認するために範唱用CDを聴いている子どもたちの様子から確認することができた。文語文の美しさは、子どもたちが国語授業よりも先に音楽授業の歌唱指導において学ぶ方が効果的であるように思われた。子どもたちは、文語文の方が簡潔な

スタイルであるために、想像の可能性が広がっていくことを納得していったようであった。また、呼吸のタイミングをそろえることや、その手がかりをピアノ伴奏から確認すること、呼吸のタイミングがそろったときに独特の満足感が得られること、旋律の中にみられるエネルギーの動態に注意していくと望ましい表現のあり方がみえてくること、いろいろなことに注意しながら歌唱表現を工夫していくと音楽が詳しくみえてくること、歌詞の意味がみえてくると歌いやすくなること等を発見し、音楽を探究することのおもしろさを知ることができたようであった。

(3) 大学の授業での実践の効果

遠隔授業観察システムによって、大学の授業と附属、小学校の授業を重複させた実践は、大学における授業改善において、新しい成果と課題を意識させた。これまで、筆者は、学術的な論理に基づいて実践に可能な限り接近する講義を行ってきたが、筆者自身が学術的な理論を反映させた音楽授業を具体的に例示することによって、学生たちは理論と実践との間に残されていた問題状況を解決させる糸口をつかむことができたようであった。学生たちは、音楽の学習の展開過程や教授方術の発現過程を納得して読み取り、自分自身の臨床的な指導力の育成のために意識するべき課題をいっそう強く抱くことができるようになった。特に、筆者自身が授業を実践し、反省的な思考をまだ試みていない場面で、つまり、実践直後の場面で、学生たちとともに授業を反省的に振り返り、ともに分析的に授業をとらえ直す活動は、この遠隔授業観察システムを活用するまでは、できなかった瞬間であった。筆者が附属小学校で授業を行い、時間を経た後に録画したビデオを大学の講義で紹介する場合とは異なった、臨床的な教師教育が実現されたと実感している。

おわりに

筆者の遠隔授業観察システムの可能性を探る実験的な試みは、緒に就いたばかりではあるが、確かな可能性を確認することができた。ハード面での問題は、システムの専門家にゆだねなければならないが、臨床的な教師教育を展開するために工夫すべき教材開発の可能性が広がってきたことは間違いないと確信している。今後は、授業活動場面を拡大させ、より広範な視野から授業実践事例を提供することができるよう検討していきたい。最後に、附属小学校での筆者の授業実践を実現させるために協力してくださった附属小学校の音楽担当の小川教諭と大西教諭、北講師、そして、システムを円滑に作動してくださった藤原助教と松田助教に感謝したい。

注および参考文献

- 1) 長島真人 「音楽教授における指導方略と指導方術」
『音楽科重要用語300の基礎知識』吉富功修 編 明治
図書 p.152 2001
- 2) 中村雄二郎 『臨床の知とは何か』岩波書店 p.136
1992
- 3) 長島真人 「音楽授業のための教材解釈の方法に関する
原理的考察－S. K. ランガーのシンボルの哲学の論
理に基づいて－」『日本教科教育学会誌』日本教科
教育学会 第26巻 第3号 pp. 1-10 2003
- 4) 同上書 p.3
- 5) 同上書 p.3-4
- 6) 長島真人 「音楽の真実を求める学びの共同体の形成
をめざした音楽授業の構想－歌唱指導における音楽に
よるコミュニケーションの成立を視点として－」『学
校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会 第8
巻 pp.130-140 2004
- 7) 吉本均 『授業の構想力』明治図書 pp.51-61
1983
- 8) この「冬げしき」が日本人の愛唱歌として親しまれ
続けていることは、多くの叙情歌曲集や愛唱歌集に必
ず掲載されていることから確認される。また、最近で
は、次に示すように、アメリカ人によって英訳され、
レコーディングされているものも存在している。
Greg Irwin "Japan's Best Loved Songs of the Season" The
Japan Times. pp. 32 - 35, 46 1998
- 9) 堀内敬三 井上武士 編 『日本唱歌集』岩波書店
p.198 1958 現在の教科書では、歌詞は次のように
改変されて紹介されている。

一 さぎり消ゆる 港えの
船に白し 朝のしも
ただ水鳥の 声はして
いまだ覚めず 岸の家

二 からず鳴きて 木に高く
人は畑に 麦をふむ
げに小春日の のどけしや
返りざきの 花も見ゆ

三 あらしふきて 雲は落ち
しぐれふりて 日はくれぬ
もしともしびの もれこずば
それとわかじ 野辺の里
(『音楽のおくりもの』教育出版 pp.34-35 2005)

冬げしき

交響楽編曲

1 あ り な ふ り す か ら 3 あ り な ふ り す か ら

み な と え の け と は

ゆ り な け び と は

き きて く も は 新 ら

な だ み と り の こ え は

ひ も し こ は る ひ の の と け し

も し こ も し び の も れ こ す

あ の し も こ の し

き を ふ ひ は くれ ぬ

あ り け れ と

さ だ り と

い ま え べ の

い か そ

あ げ ぬ

し の い え

な も み け

べ の き

て や ば

し の い え

な も み け

べ の き

て や ば

5年 組 番 (名 前)

5年生のみなさんへ

専門教育大学の長島真人(ながしま まこと)です。音楽の授業を2時間させていただきました。まず、教科書にある「冬げしき」という歌の楽譜をします。授業の前に、つぎの質問に答えください。

1. 学校の音楽の授業では、どんな活動が好きですか?好きなものに○をつけてください。○はいくつつけてもいいです。

- みんなでいっしょに歌う。()
- 一人で歌う。()
- みんなでいっしょに楽器を演奏する。()
- 一人で楽器を演奏する。()
- みんなでいっしょに楽器や音の出るものを使って音楽を作る。()
- 一人で楽器や音の出るものを使って音楽を作る。()
- いろいろな音楽を聞く。()
- 音楽に関するビデオをみる。()
- 楽器を響かしながら、音楽を作してみる。()

2. 「楽しい冬のうた」で知っているものがあれば、曲の名前を書いてください。

3. 「静かな冬のうた」で知っているものがあれば、曲の名前を書いてください。

「冬げしき」ワーク・シート (No.1)

5年 組 番 (名前)

1. この歌は、どんな感じの音楽であると思いますか?あてはまるものを○でかこんでください。

にぎやか	おだやか	はげしい	ゆるやか
しずかな	うるさい	おちつく	元気がでる
せいけつ	ふけつ	ふくざつな	わかりやすい
平和な	きげんな	こわい	やさしい
かなしい	うれしい	わくわくする	ふしぎな

2. 歌詞(かし)のしみを考えながら、スムーズに歌えるようになりましたか。

- ア、スムーズに歌えるようになった。
- イ、だいたいスムーズに歌えるようになった。
- ウ、あまりスムーズに歌えなかった。

3. みんなで息をそろえて歌えましたか。

- ア、息をそろえて歌えた。
- イ、だいたい息をそろえて歌えた。
- ウ、あまりできなかった。

4. 冬のけしきを音楽から想像しながら、歌い方を工夫することができましたか。

- ア、自分なりに工夫することができた。
- イ、だいたい自分なりに工夫することができた。
- ウ、あまり工夫することができなかった。

5. もう一時間、「冬げしき」を勉強します。次の時間は、どんなことに注意して勉強したいですか?

「冬げしき」ワーク・シート (No.2)

5年 組 番 (名前)

1. みんなで息をそろえて歌えましたか。

- ア、息をそろえて歌えた。
- イ、だいたい息をそろえて歌えた。
- ウ、あまりできなかった。

2. 「音楽の山になるところ」を感じとることができましたか。

- ア、よく感じとれた。
- イ、だいたい感じとれた。
- ウ、あまり感じとれなかった。

3. 「音楽の山になるところ」を生かしながら歌い方を工夫することができましたか。

- ア、よくできました。
- イ、だいたいできました。
- ウ、あまりできなかった。

4. この音楽の気持ちにあった歌い方を工夫することができましたか。

- ア、よくできました。
- イ、だいたいできました。
- ウ、あまりできなかった。

5. 今日で、この「冬げしき」の勉強は終わります。あなたは、この2時間の音楽の授業で、どんなことを感じ、考えましたか。